



Title	明治末期から昭和初期におけるミシンを用いた裁縫と手芸
Author(s)	池田, 仁美
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治末期から昭和初期におけるミシンを用いた裁縫と手芸

池田 仁美 武庫川女子大学 生活環境学科

はじめに

米国シンガーミシン会社は、明治 33 (1900) 年に日本国内でミシンの販売を開始した。同社は、明治 39 (1906) 年に東京市麹町区有楽町にミシン裁縫の専門学校である「シンガーミシン裁縫女学院」を設立した。同院では、家庭における洋服裁縫を主な目的としたミシン裁縫の指導をおこなっていた。しかし、シンガーミシン会社の想定通りに洋服の普及が進まず、家庭向けに販売したミシンの使用用途は和服の裁縫や刺繍に発展した。本研究は、洋裁文化の受容と並行して、ミシンが日本の衣服文化に適応するように裁縫や手芸の道具としての役割を果たしていたことを考察する。

シンガーミシンの学校のミシン刺繍教育

ミシン刺繍は、ミシンの押さえ金を上げ、送りを下げて自由に布を動かせる状態にし、両手の操作で針目の長さや向きを調節しながら縫い上げる¹。武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室では、昭和初期頃にシンガーミシンの学校で学んだ生徒の授業教材であるとされるミシン刺繍の実物教材を所蔵している。図案は二羽の鶏で、細いミシン糸を羽の毛並みにそって立体感を表現しながら幾重にも重ね合わせたもので、繊細な技術が必要なものであったことがわかる。

「シンガーミシン裁縫女学院」では、洋服裁縫の他、和服裁縫にミシンを使用する方法についても研究されていた。また、院長である秦利舞子は米国のウエスタマン嬢からミシン刺繍の技術を学び、明治 40 (1907) 年には同学院の随意科におい

てミシン刺繍の指導教程の設置を含む学則改正の申請をおこなった。和洋服裁縫以外のミシンの使用方法としてミシン刺繍を国内で指導した最初教育期間であったといえる。秦利舞子は、婦人のためにミシン使用の裁縫を教授し、自生の進歩に伴える衣服製作の道を教えることを同学院の創立の際の教育目標としていた。ミシン刺繍は和服の半襟や帯にも施すことができ、女性の内職にもなったことから、ミシンは刺繍をする手芸の道具としてだけではなく、自活を実現するための裁縫道具に新たな機能をもたせるという意図があった。

ミシンの用途は、着用機会の多くない洋服裁縫の道具からミシン刺繍の道具へと変化した。「シンガーミシン裁縫女学院」は、明治 43 (1910) 年に学校の名称を「シンガー裁縫刺繍院」に変更したことからミシン刺繍教育の需要が高まっていたことがわかる。同院は、大正 5 (1916) 年に改組し、「シンガー裁縫院」となるが、その際には、ミシン裁縫普通科、ミシン裁縫高等科、ミシン刺繍科を主たる学科とし、ミシン刺繍の指導が継続しておこなわれていたことがわかる。

夏期講習会に見るミシン刺繍教育

ミシン刺繍教育は、正規課程の授業とは別に、短期に在学生以外を対象にして開催される夏期講習会にも見る事ができる。夏期講習の生徒募集広告において、明確に指導内容を“ミシン刺繍”と記述している記事に限ると、「シンガー裁縫院」の他、「文化裁縫女学校」主催の洋裁手芸夏期講習会では、昭和 4 (1929) 年に 5 日間²、昭和 5 (1930)

年（受講日数不明）³，昭和6（1931）年にシンガー会社刺繍主任田中とり子を講師として6日間⁴，昭和7（1932）年に2回（各7日間）⁵の日程でミシン刺繍の指導があった。「東京女子高等ミシン学校」主催の夏期講習では，昭和6（1931）年に3回（各7日間～10日間）⁶，昭和8（1933）年に7日間⁷の日程でミシン刺繍の指導があった。昭和12（1937）年には，「東京洋裁学園」主催の第21回洋裁手芸夏期講習会が3回（各5日間）開催され，ミシン刺繍科は手芸部の講習内容に含まれた⁸。他の手芸部の講習内容は，人形科，編物科，レース科，ウッドビーズ科，小物料があり，ミシン刺繍は機械を用いる手法によるものの，ミシン裁縫とは区別した手芸として受容されていたことが窺える。

シンガークラフトとドロンワーク

シンガークラフトは，昭和8（1933）年頃にシンガーミシン会社が考案したミシン手芸である。シンガークラフト定規を使用し，その定規に巻き付けた毛糸を地布に縫いつけ，定規を引き抜くと同時に定規についたナイフで輪を切り，地布に毛足の長い装飾を施すことができる。洋服やインテリアに用いられ，保温性を高める効果があることから，実用的な要素も含まれる手芸である。シンガークラフトについては，ミシン刺繍のように講習会がおこなわれた記録はなく，大流行したという記述もない。しかし，昭和27（1952）年5月号『主婦之友』附録「圖解式ミシン裁縫独習書」においては，シンガークラフト定規に酷似した道具「リヤリード」が紹介され，主婦之友代理部で通信販売もしており，戦後にミシン手芸として再登場したことがわかる。また，同書では，ミシンによるドロンワークの手法についても掲載している。ミシンを活用したドロンワークでは，布地の経糸や緯糸を引き抜き，残りの糸にミシンでステッチをかける。その手法は，秦利舞子が既に明治45（1912）年の自著『みしん刺繍ひとりまなび』で

著しているが，専門的に技術指導講習をおこなった記録はない。ドロンワークにおいても前掲「圖解式ミシン裁縫独習書」では多数の作例を紹介しながら手順の解説を掲載している。作例は，洋風のインテリア小物を中心としており，戦後の生活の変化に適応し，ミシン手芸はより柔軟に適応していったことが窺える。

おわりに

明治末期に洋服の裁縫機械として導入されたミシンは，和洋裁のための“縫い合わせる機械”という位置付けであったが，そこにミシン刺繍やシンガークラフト，ドロンワークなど手芸要素のある活用法が考案されることで，“装飾する機械”という要素も加わった。ミシン刺繍は，洋裁の受容に関係なくできたことから，ミシン裁縫教育と並行した教育機会が設けられ，戦後の装飾手芸文化にもミシンを活用する素地となったと考えられる。

注

- 1 秦利舞子『みしん刺繍ひとりまなび』日本実業商会，1912
- 2 「夏期講習会一覧（二）」『婦女新聞』1929年7月7日
- 3 「夏期講習会一覧（一）」『婦女新聞』1930年6月29日
- 4 「夏期講習会一覧（其二）」『婦女新聞』1931年7月12日
- 5 広告欄『婦女新聞』1932年7月3日
- 6 「夏期講習会一覧（其四）」『婦女新聞』1931年7月29日
- 7 「夏期講習会一覧（其四）」『婦女新聞』1933年7月23日
- 8 広告欄『婦女新聞』1937年6月27日